

一期一会

伊集院中学校人権・同和教育係

「中尾健志さん講演の感想」

未熟児で生まれ脳性麻痺が原因で足にハンディキャップのある中尾健志さんの話を聞く機会がありました。中尾さんは講演で私たちに多くのメッセージを伝えてくれました。そして私たちは差別について「気づく」機会を持つことができました。私たちはその「気づき」を通して人として成長し変わることができます。しかしながら、話を聞いてすぐにも変わることもまた難しいことかもしれません。でも、確かに言えることはその「気づき」を繰り返すことで私たちは学び、必ず変わります。そこで、紹介するみなさんの感想から学びなおしをして下さい。とてもすばらしい感想なのでもう一度、思いをめぐらせましょう。

講演の感想より

○皆と違うところを持っている人はかわいそうなのではなく、ひとり一人の特別な個性なのだと考えることができるようになりました。また、ハンディを持っている人たちに差別をしてしまっていたのだと気づきました。

○「しょうがい」を持っている人への差別などを自分はしていないだろうかと怖くなりました。もし、無意識にそんなことをしてしまっていたら、と考えると、自己嫌悪に陥ってしまいます。見直さないと、と思いました。

○私は部活動でこの人と組みたくないな、と思ったことがあります。差別しているとは思っていませんでしたが、無意識に差別していたんだと気づきました。

○講演を通して、知らないことで差別をしていることを知ることができました。自分ではそのつもりがなくても差別しているかもなっていることに気づくことができました。また、車イス用のトイレでも車イスを使っている人に対しては不快な思いをさせていることが分かりました。使いたい人が使えばいいと思います。

○自分にできて相手ができないことを自然と差別してしまっていることに気づきました。それぞれできないこともたくさんあるし、その人しかできないこともあるので、お互いに尊重し合いながら生活することが大切なんだと思いました。私が小学校のとき、クラスに車イスの子がいて、中尾さんがおっしゃっていたように普通に接してあげられたかな、と考えてしまいました。

○差別をなくすために自分の実体験を話している中尾さんを見ていて、どれほど勇気があることだろうと感心しました。私は中尾さんの話を聞いて「かわいそう」と感じていました。でも、聞いていくうちに中尾さんの気持ちが分かってきて、最初のころと考え方が変わってきました。この講演のおかげで差別についてよく考えられたと思います。

○中尾さんの周りにはたくさん優しい方がいて、特に小学校でのエピソードではまだ、小学2年生でありながら、ハンディを持っている中尾さんに対して差別的な事を発言することなく当たり前一人の友だちとして接する友だちの姿をとってもかっこよく思いました。





○私は遊びに行った時にハンディを持っている人をジロジロみてしまいました。そのときは自分では気づきませんでした。そのことが差別していることに今日の講演で気づきました。

○「友だちとは？」と聞かれた時に「命をかけても守りたい」という言葉が心に残りました。友だちに対する熱い友情が感じられました。また、私は以前、友だちにきらわれたくなくて、ついにじめの言葉に乗ってしまいました。今後はきらわれてもいいじめを止めたいと思いました。

○ハンディは皆が持っている。そのハンディがあるから「皆が違って皆がいいという言葉が生まれたのかな、と思いました。」中尾さんの話が私の中のしょうがい者に対する態度をあらためて、かわいそうという思いからみんなと変わらないという思いに変わりました。

○しょうがいを持っている人がいても「かわいそう」とは思わないで、普通に接していこうと思う。まだ、自分でも何で「かわいそう」と言ったらイヤな気持ちになるのかは分からないが、「かわいそう」という感情を持った時に考えてみようと思いました。

○知らず知らずのうちに差別をしてしまっている今までの自分に気づくことができました。また、私は今、何を改めるべきだろうと、深く考えることができました。少しでも差別を無くすことができるように努めていきたいです。

○自分は「差別」というのを意識しているわけではなく、自然としてしまっているんだ。と、感じました。個性はひとり一人違うし、また、自分にもあるのでそれは一つの「花」だと思います。だから、ひとり一人の「花」をしっかりと受けとめて、お互いを尊重し合えるような行動をとっていきたい。

○私は考え方を考えることができました。「しょうがい」というのを病気とだけ考えていましたが、今日はそれを個性という話を聞き、とても考えさせられました。ひとり一人個性があるからこそ、人は仲間をつくってみんなと支え合うのだと思う。だから、自分にあるたくさんの個性はいろいろな人と生きていく中で支え合うためにつかいたい。



○僕も昔「あの人はみんなと違う」と思い、あまりしゃべれないことがありました。今日の講演を聞き、それはだめということに気づくことができました。その子のことを「もっと知り」支える事が大切だと中尾さんが教えてくれました。

○「できる環境があるのだから、やればいじゃないですか。」の言葉が今の私にとっても深く残りました。できる環境に感謝しながらやらなければならないと思いました。

○私には受け入れられない私の個性があります。どうにか押さえ込もうと必死になっています。しかし、中尾さんの自分を受け入れる姿がとても自然体でリラックスしていたので受け入れられるようになりたいと思いました。また、相手のこともありのままに受け入れてたいと思いました。

○こういう風に自分の事を色々話せてすごいなと思いました。特に心に残った所は「自分の心のバリアをはずして、本当の自分をだす」という話のところ。私も本当の自分をあまり出すことができないので、こういう話を聞けて良かったです。



○「けんじょうしゃ」「しょうがいしゃ」という言葉があるせいで差別が生まれてしまうのではないかと思った。ハンディがあろうがなかろうが友だちの存在があるだけで生活はとても楽しくなる。

○「けんじょうしゃ」「しょうがいしゃ」という言葉があるせいで差別が生まれてしまうのではないかと思った。ハンディがあろうがなかろうが友だちの存在があるだけで生活はとても楽しくなる。

一期一会

伊集院中学校人権・同和教育係

「俺、うんこ、ちびちゃった！」

未熟児で生まれ脳性麻痺が原因で足にハンディキャップのある中尾健志さんの話を聞く機会が10月13日（土曜授業）にあります。これまで中尾さんの話を数回聴いたことがありますので、その中でとくに印象に残っている場面を紹介します。

講演の内容より

私が小学校2年生の時、両親が離婚することになりました。母親と離れた寂しさは口で表すことのできない寂しさでした。体調を壊して下痢が続くようになり学校を休みがちになりました。

休みが続いている中、担任の先生はいやがる私を遠足に連れていきました。しかし、私は遠足の場でもらしてしまいました。トイレで着替えをさせる先生に対して私は、「だから遠足に来たくなかった」と泣いて抗議しました。すると、そこに3人の友だちがかけ込んできて、そのうちの一人が私の顔の前で大量のうんこをもらしました。そして、悪びれることもなく「俺、うんこ、ちびっちゃった。先生、僕のおしりも洗って」と言いました。「たくさん出たな」と言う他の友だちに対して、「お前たちがいけないんだ。走るとけつの穴が開くんだぞ」と言い返し、「健ちゃんパンツかして」（中尾健志さんはいつも数枚のパンツを用意しています）と言って私のパンツをはき、「もう全部出したから大丈夫。健ちゃんも後で来てね。」と言い残し、また遊びにいきました。私はその姿を見て笑い、気持ちが楽になったのを覚えています。そして、もらすことに対しての恥ずかしさが薄れ、学校に行くことができるようになりました。



この遠足の場面から、皆さんはどんな事を考えますか？何を感じましたか？

本当の友だちについて考えてみてください。この場面からきっとみなさんにとって学ぶものがありますよ。

彼は講演でこのようなことも伝えていきます。

できる環境があるのに「どうせ自分ではできないんだ。」と思う人は腹立たしい。何でできないと分かるの？自分の可能性を自分でつみとってほしくない。

最後に次のように締めくくっています。

「自立という字は自分で立つと書きますが、私は何かの支えが無ければ立てません。私の支えは、家族、友人です。でも支えを必要としているのは私だけでしょうか。**私は、ハンディが一つもない人はいないと思います。人は支え合う仲間がいてこそ自立できると思います。**私や私の友人を見てもらえば、そのことを理解してもらえんと思います。」

「最後に、これは私の願いなのですが、私はいつか、人を「けんじょう」者、「しょうがい」者という言葉で分けることがなくなることを願っています。」

※講演当日、この通信に書いてある意味をじっくり考えてみてください。